

Title	移動現象に見る意味と統語のインターフェイスの性質
Sub Title	
Author	小町, 将之(Komachi, Masayuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.66 (2008. ) ,p.127- 130
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成19年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000066-0127">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000066-0127</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

覚されたと考えられる。一方の一致条件では、TF は白の（明るい）背景と同一平面に知覚され、背景からの対比を受けて暗く知覚されたと考えられる。また、TF は一様な透明面として格子の手前に現れることもあったが、このときには透明視における明るさ同化（新井, 2005; Morinaga et al., 1962）が生じて暗く知覚されたのではないだろうか。同様に白格子条件においては、不一致条件で TF が白の格子と同一平面に知覚されたことから、格子からの対比を受けて暗く知覚され、一致条件では黒の背景と同一平面に知覚されたことから、背景からの対比を受けて明るく知覚されたと考えられる。TF が透明に見えたときに生じていたのは、透明視における明るさ同化であろう。しかしながら、一致条件における対比（または同化）と不一致条件における対比のどちらの変化量が大きかったのかは現時点では明らかでなく、今後の検討が必要である。

本研究から、現象的に面が分岐する場合にも、面の明るさは同一平面に知覚される領域からの影響を受けやすいことが示唆された。しかしながら、面の現れ方が一義的に決まらなかった点や明るさ変化量が定まらなかった点についてはさらに詳細な分析が必要である。

### 引用文献

- 新井哲也 (2005). 透明視再考—明るさ変化の問題として見た透明視現象—慶應義塾大学社会学研究科紀要, 59, 47-54.
- Gilchrist, A. (1977). Perceived lightness depends on perceived spatial arrangement. *Science*, 195, 185-187.
- Gilchrist, A., Kossyfidis, C., Agostini, T., Li, X., Bonato, F., Cataliotti, J., Spehar, B., Annan, V., & Economou, E. (1999). An anchoring theory of lightness perception. *Psychological Review*, 106, 795-834.
- Hartline, H. K., Wagner, H. G., & Ratliff, F. (1956). Inhibition in the eye of Limulus. *Journal of General Physiology*, 39, 651-673.
- Morinaga, S., Noguchi, K., & Ohishi, A. (1962). Dominance of main direction in the apparent transparency. *Japanese Psychological Research*, 4, 113-118.
- Wolff, W. (1933). Concerning the contrast-causing effect of transformed colors. *Psychologische Forschung*, 18, 90-97.

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

## 移動現象に見る意味と統語のインターフェイスの性質

小 町 将 之

### 1. はじめに

本研究では、(1)のような多重空所構文を取り上げ、それがどのような言語知識の仕組みに支えられているかについて、検討を行った。(1a)は等位接続構文もっており、一律抜き出し (Across-the-Board, ATB) 構文と呼ばれ、(1b)は片方の空所が付加詞節内に生成される寄生空所 (Parasitic Gap) 構文と呼ばれる。

- (1) a. Who did [Ray ask \_\_\_\_] and [Andy convince \_\_\_\_]? : ATB 構文  
 b. Which article did John file \_\_\_\_ [without reading \_\_\_\_]? : 寄生空所構文

この2つの構文は、1つの *wh* 句に対して空所が複数あるという点だけでなく、いずれの空所にも移動が関与していると考えられるという共通点をもつことから、構造的に何らかの関係があると考えられてきた。1つのアプローチは、ATB 構文を寄生空所構文の特別な場合として導くものである (Citko, 2005 など)。もう1つは、寄生空所構文を ATB 構文の特別な場合として導くアプローチである (Williams, 1977 など)。本稿では、これらの構文の言語類型論的な分布についての調査に基づいた一般化を提示し、それが後者のアプローチを支持することを論じる。

## 2. 寄生空所の特徴

寄生空所と見えるものには、移動が関与しない疑似寄生空所 (pseudo parasitic gap) と呼ぶべきものも含まれる (Postal, 1994)。このような空所を分析の対象から除外するため、この節ではまず、寄生空所を含む文の特徴をまとめ、調査の対象である寄生空所がどのような性質をもつものかを特定する。

(1b) に例示された文の構造を (2) のように仮定する (Chomsky, 1986)。構造中の *t* は移動の痕跡、*pg* が寄生空所を現している。

(2) Which article did John file *t* [OP without reading *pg*] ?



このとき、寄生空所が認可されるには、いくつかの要件を満たさなくてはならない。

1つは、*wh* 移動を含む A バー移動の存在に依存することである。たとえば、*wh* 移動が含まれる (1) の文では寄生空所が認可されるが、(3a) の多重疑問文や (3b) の問い返し疑問文のように、*wh* 移動が含まれない文では寄生空所は認可されない (Engdahl, 1983)。

(3) a. \*I forgot who filed which articles [without reading *pg*] ?

b. \*John filed which articles [without reading *pg*] ?

もう1つの要件は、寄生空所が、そこからの抜き出しが認可されない位置 (「島」と呼ばれる。) に生成されることである (Engdahl, 1983)。たとえば (4) に見るように、(1) の寄生空所の位置からの *wh* 移動による抜き出しは認可されない。

(4) \*Which article did John file the papers [without reading *t*] ?



このような要件にもかかわらず、島の中でさらに島に埋め込むと島の違反が生じることに注意する必要がある (Kayne, 1983)。 (5) の例を見てみよう。

(5) a. ?the books [OP you should read *t* [before it becomes difficult to talk about *pg*]]



b. \*the books [OP you should read *t* [before [talking about *pg*] becomes difficult]]



関係節内の空演算子 (OP) の移動が A バー移動だが、*before* の導く付加詞節内の寄生空所が、主語節という別の島にさらに埋め込まれた場合に容認されない。このような性質は、(2) の構造で仮定されているように、付加詞節内で主節の A バー移動とは別の移動が生じていることを支持する証拠と考えられる。疑似寄生空所がこのような性質を含まないことは、その場合には、付加詞節内に別の移動が関与していないことを示唆している。

3. 類型論的一般化

本節では、(1a)のような ATB 構文と前節でまとめた寄生空所構文とについて、その類型論的分布が(6)の一般化に従うことを提案する。

(6) 一般化: 寄生空所構文は、ATB 構文を許す言語の真部分集合の言語においてのみ認可される。この観点から言語のタイプを分類すると、論理的には(7)に挙げる4つのタイプがありうる。

(7)	ATB 構文	寄生空所構文
タイプ A	ok	ok
タイプ B	ok	*
タイプ C	*	ok
タイプ D	*	*

もし(6)の一般化が正しいとすれば、タイプCの言語は存在しないことが予測として帰結する。すなわち、ATB 構文を許さず、寄生空所構文を許すような言語は存在しない。この予測は(8)の観察によって支持される。

(8)	ATB 構	文寄生空所構文	
英語	ok	ok	タイプ A
イタリア語	ok	ok	タイプ A
スペイン語	ok	ok	タイプ A
フランス語	ok	ok	タイプ A
ドイツ語	ok	*	タイプ B

本研究における調査で、(7)に挙げられた4つのタイプのうち、タイプAとタイプBの言語があることは観察されたが、タイプCとタイプDのような言語は観察されなかった。タイプDについては、ATB 構文が許されない言語は今のところ観察されていないため偶然の空白と捉えざるをえないが、タイプCの言語が見られないことは、(6)の一般化からの帰結と考える。

タイプBの言語として、ドイツ語が挙げられる。一見したところ寄生空所構文にみえる例は、ドイツ語にも存在する。たとえば、(8)の例において、ohne ('without') 句内にも空所があるように見られる(Felix, 1985)。

↓

(8) [Welches Mädchen] hat Hans *t* [ohne *pg* anzuschauen] geküßt?  
 which girl has Hans *t* without *pg* to-look-at kissed  
 'Which girl did Hans kiss without looking at her?'

しかし、この言語における寄生空所の分布は語彙的にも非常に限られている上に、2節で触れた疑似寄生空所の性質を示すことが報告されている(Sabel, 2000; Kathol, 2001)。たとえば、(9)の例が示すように、島の中に島を埋め込む違反が、ドイツ語の場合には観察されない。

(9) [Was<sub>1</sub> hat [[ohne mit anderen zu sprechen [um *pg* nicht öffentlich bekannt zu machen]]  
 wh has without with others to speak in-order *pg* not publically known to make  
 eigentlich der Minister geglaubt [wen<sub>1</sub> die Polizei *t*<sub>1</sub> bespitzelt hat] ?  
 actually the minister believed who the police spied-upon has

この例において、ohne ('without') の付加詞節内の寄生空所がさらに島に埋め込まれている。

以上、現在観察されている限りにおいて(6)の一般化が類型論的に正しいことを見てきた。この一般化が偶然の結果でないとすると、人間の言語知識の反映として説明される必要がある。1節でATB構文と寄生空所構文の関連付け方についての2つのアプローチを見たが、ここでの知見は、多重空所構文の統一的な捉え方としては、寄生空所構文をATB構文の特別な場合として導くアプローチを正しいものとして支持することになる。

### 参考文献

- Chomsky, N. 1986. *Barriers*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Cinque, G. 1990. *Types of A'-Dependencies*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Citko, B. 2005. On the Nature of Merge: External Merge, Internal Merge, and Parallel Merge. *Linguistic Inquiry*, 36, 475-496.
- Engdahl, E. 1983. Parasitic Gaps. *Linguistics and Philosophy*, 6, 5-34.
- Hornstein, N. and J. Nunes. 2002. On Asymmetries between Parasitic Gap and Across-the-Board Construction. *Syntax*, 5, 26-54.
- Kathol, A. 2001. On the Nonexistence of True Parasitic Gaps in Standard German. In P. W. Culicover and P. M. Postal (eds.), *Parasitic Gaps*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Nunes, J. 2004. *Linearization of Chains and Sideward Movement*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Postal, P. 1994. Parasitic and Pseudo-Parasitic Gaps. *Linguistic Inquiry*, 30, 159-186.
- Sabel, J. 2000. The Typology of *Wh*-Questions. In U. Lutz, G. Muller, and A. von Stechow (eds.), *Wh-Scope Marking*, Amsterdam: John Benjamins.
- Williams, E. 1977.

\* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻

## 私立学校の学童集団疎開

——慶應義塾幼稚舎疎開学園を事例として——

柄 越 祥 子\*

### 1. 研究目的

本研究は、私立小学校の学童集団疎開の経緯を通して戦時下の私立学校の実態、ひいては戦時下教育の在り様を明らかにしようとするものである。学童集団疎開史の本格的な研究は1983年の逸見勝亮の研究を嚆矢とし、90年代にかけて蓄積がなされ、近年では受け入れ側の研究も進んでいるが、そのほとんどは公立の国民学校を素材としたものである。昭和16(1941)年「国民学校令」において「認定学校」とされた、いわゆる私立小学校も、一般の国民学校とほぼ同じ時期に似たような条件で集団疎開を実施させられている。しばしば指摘されるように、国民学校でさえ、疎開は「地域・学校によって落差が大きい」とされるが、それ以上にひとくくりにはできない私立学校の疎開状況は、いまだ各学校史の域を出ていない。各学校に残された史料を、行政史料や受け入れ地の史料と組み合わせながら、疎開の実態をより客観性を持って明らかにするとともに、似た状況の私立学校や一般国民学校などとの比較に